

【2024 年度地域連携事業費報告書】

浜松領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業 ～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～（第3期）

代表者：河野 貴大（看護学部）
分担者：吉本 好延（リハビリテーション学部理学療法学科）
連携機関：加納 江理（静岡県立大学看護学部）
赤石 ゆかり、小出 弘寿、松下 太一（北斗わかば病院）

1. 背景

パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの神経難病は、進行性の経過をたどり、障害される神経の系統や支配する身体部位に応じて、多様な症状や障害が出現する。近年、医療の高度化や病院機能の分化、在院日数の短縮などの影響により、神経難病の療養者は在宅での生活を主体とする傾向が強まっている。一方で、在宅療養を支援する訪問看護師は、病状の変化に対するアセスメントや判断、さらに介護サービスの調整などにおいて、不安や困難感、負担感を抱えることが多く、こうした実情は先行研究においても報告されている。

申請者らは2018年度より「神経難病支援者の会」を発足し、神経難病療養者が病期に応じた適切な支援を受けられるよう、多職種連携による研修会や交流会を企画・運営してきた。本会のメンバーは、病院看護師、訪問看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、薬剤師など、地域の多施設・多職種の専門職者で構成されている。定期的な隔月会議では、神経難病療養者の在宅支援に関する情報共有や課題の抽出を行っている。

2023年度（第2期）には、「コミュニケーション支援」に関する研修会を1回、「神経難病療養者の事例を用いた課題解決ツール研修会」を1回、計2回の研修会を実施した。これらの研修会には、地域の在宅療養支援者に加え、今後の浜松市における医療・介護を担う大学生も参加した。研修会後のアンケートでは、「初めての体験でとても良い学びになった」といった感想のほか、「毎年開催してほしい」「参加できる人数を増やしてほしい」といった意見も寄せられ、学習機会の継続的な提供の必要性が改めて明らかになった。

こうした背景を受け、2024年度も本事業を継続し、支援者同士が交流できる機会の創出や、知識・技術向上を目的とした研修会を実施することとした。また、神経難病療養者が安心して暮らせる地域づくりを進めるためには、現在の支援者のみならず、将来の在宅医療・介護を担う人材への理解促進も重要である。そこで第3期では、県内の大学生に加え、浜松市内の私立高校にも参加を呼びかけることとした。

2. 目的

本事業の目的は、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質を向上させ、療養者とその家族が安心して地域で暮らせる環境を整備することである。そのために、多職種連携を強化し、支援者の知識・技術の向上を図るとともに、次世代の医療・介護を担う人材育成にも取り組む。本事業では、以下の3つの目標を掲げ、具体的な活動を展開する。

- 神経難病療養者の在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上を図り、適切なケアを提供できる人材を育成する。
- 神経難病療養者の支援に関わる多職種間の「相談しやすい関係づくり」を推進し、在宅ケアの円滑な提供を可能にする。

該当欄の□を■にし、必要事項を記入してください

倫理審査	□承認番号（ ） ■該当しない	
利益相反	■なし □あり（ ）	
発表状況	種別	□著書 □論文 □学会発表 □紀要 □その他（ ）
	年月日	年 月 日（□確定 □予定）

【2024 年度地域連携事業費報告書】

3. 浜松市の在宅医療・介護の将来を担う高校生・大学生が、地域における専門職の連携の実際を学び、次世代の支援者としての意識を高める。

3. 方法・実施内容

神経難病療養者を支えるネットワーク作りのための多職種交流を兼ね、研修会や事例検討会を3種類、計4回開催した。各研修会終了後には研修会の質向上を目的にWEB上で回答する任意のアンケートを実施した。また、研修会の企画・運営や地域の課題に関する情報共有のため、専門職による会議を隔月開催した。

①神経難病療養者とのオンライン交流会

日時：2024年7月20日（土）：15：30～17：00

場所：オンライン（Zoom）

対象：浜松市内の高校生

講師：絵本作家 くぼりえ

内容：事前学習をもとに質問内容をまとめ、オンラインで交流した。

②神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

日時：2024年7月27日（土）13：00～17：00

場所：北斗わかば病院 南棟2階リハビリテーション室

対象：県内の高校、大学に通う学生

在宅領域を中心に医療・介護・福祉に関わるすべての職種

講師：NPO法人 ICT救助隊

内容：ICTを活用したコミュニケーション支援に関する講義の後、研修会の参加者を4グループに分け、4つのブース（透明文字盤の体験、視線入力装置の操作体験、オリジナル入力スイッチの体験、iPadを活用した入力体験）をそれぞれ30分ずつ体験した。

③神経難病療養者のよりよい支援を目指してー課題整理のツールを使った事例検討会ー

日時：2024年6月14日（金）、2025年2月28日（金）18：30～20：00

場所：オンライン（Zoom）

対象：神経難病療養者に関わる医療従事者

講師：静岡県立大学 加納江理

事例提供：北斗わかば病院 赤石ゆかり

内容：講師による講義・ツールの解説の後、事例の紹介が行われた。参加者は事例についてツールを用いて課題の整理を行い、グループに分かれて討議および全体の共有を行った。

4. 結果・実施後の評価

①神経難病療養者とのオンライン交流会

浜松市内の高校生15名が交流会に参加した。参加者に対して事前に疾患や障がいに関する講義を行い、基礎知識をもったうえで交流会に臨んだ。在宅で人工呼吸器を使用している療養者との交流により、高校生は在宅での医療的ケアに触れる機会となり、地域社会で暮らす神経難病療養者の生活を知ることができた。また、神経難病療養者の社会参加や就労についても関心を惹起することができた。

該当欄の□を■にし、必要事項を記入してください

倫理審査	□承認番号（ ） ■該当しない	
利益相反	■なし □あり（ ）	
発表状況	種別	□著書 □論文 □学会発表 □紀要 □その他（ ）
	年月日	年 月 日（□確定 □予定）

【2024 年度地域連携事業費報告書】

②神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

本研修会には、計 46 名が参加し、その内訳は高校生 14 名、大学生 15 名、専門職 17 名であった（表 1）。研修会では講義に加え、実際に透明文字盤を用いた体験や、重度障害者用意思伝達装置「OriHime」（株式会社オリィ研究所）の操作体験を行った。

高校生は事前に神経難病療養者とのオンライン交流を行っており、透明文字盤や ICT 機器に対する関心をもって研修に臨む姿が見られた（図 1）。大学生は県内 3 大学から参加しており、他大学の学生とも積極的に交流しながら、透明文字盤や視線入力装置の操作を体験していた（図 2）。

研修会後のアンケートにおいて、「有意義な時間であったか」という質問に対し、「大変良かった」と回答した者は 38 名（82.6%）、「良かった」と回答した者は 8 名（17.4%）であり、参加者全員が肯定的に評価していた。自由記載欄には、「実際の機器を使用できたことが良かった。資料も非常に分かりやすく、今後に活かせると感じた」「難病の方のコミュニケーションを支援している方々が身近にいることを知り、非常に勉強になった」といった意見があった。また、「若い世代の参加者に刺激を受け、自身も学び続けなければと感じた」という声も寄せられた。

学生からは、「“目”をよく使う機器が多く、数分の使用でも疲労を感じた」「実習で関わった患者さんはスムーズに視線入力を行っていたが、実際に体験してみると難しくて驚いた」といった感想も見られ、体験を通じた気づきが得られたことがうかがえた。

表 1. 参加者の職種

職種	人数 (n = 46)
学生 (高校生)	14
学生 (大学生)	15
看護師	6
理学療法士	3
作業療法士	4
介護福祉士	1
介護支援専門員	2
福祉用具業者	1



図 1. ICT 機器に関する講義



図 2. 視線入力装置の操作体験

今後の要望としては、「このような講習会を再度開催してほしい」「視線入力機器それぞれの特徴をもっと詳しく知りたい」といった意見が寄せられた。また学生からは、「神経難病の子どもたちと一緒に楽しめるゲームについて知りたい」「これらの機器がどの程度普及しているのか知りたい」など、学びをさらに深めたいという積極的な姿勢が見られた。

③神経難病療養者のよりよい支援を目指して－課題整理のツールを使った事例検討会－

公益財団法人東京都医学総合研究所 難病ケア看護ユニットの原口道子氏が開発した「訪問看護のための難病看護事例検討ツール－看護の糸口をさぐる－」を活用し、オンラインによる事例検討会を 2 回実施した。第 1 回の参加者は 10 名、第 2 回は 12 名であった（表 2・3）。

該当欄の□を■にし、必要事項を記入してください

倫理審査	□承認番号 () ■該当しない	
利益相反	■なし □あり ()	
発表状況	種別	□著書 □論文 □学会発表 □紀要 □その他 ()
	年月日	年 月 日 (□確定 □予定)

【2024 年度地域連携事業費報告書】

本事例検討会で使用したツールは、難病療養者の療養生活支援において、支援の方向性に迷いや困難を感じた際に立ち止まり、情報や課題を整理することを目的としたものである。ツールは、東京都医学総合研究所のホームページより誰でも無料でダウンロードし、活用することができる。今回は、北斗わかば病院の赤石ゆかり氏より事例提供があり、参加者はオンライン上で事例の背景や課題についてグループワークを通して共有し、意見交換を行った。

実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、第1回、第2回の参加者を合わせた22名のうち「大変良かった」と回答している者が13名(59.1%)、「良かった」と回答した者が9名(40.9%)であり、参加者全員から肯定的な評価が得られた。自由記載欄には、「ツールを活用することで課題が整理できると実感した」「他職種の意見が非常に参考になった」「患者対応に困っていたので、実践的な学びになった」「このツールの認知が広まれば、より活用しやすくなると感じた」などの意見が寄せられた。

今後の要望としては、「他施設の意見を聞ける機会をもっと設けてほしい」「ケアマネジャーを対象とした基礎的な勉強会の開催を希望する」といった声が上がった。

専門職による連携会議の実施

上記の研修会に加え、2024年度内に専門職による連携会議を計8回(4月、5月、6月、8月、10月、11月、1月、2月)開催した。参加メンバーは、病院看護師、訪問看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、薬剤師、大学教員など多職種にわたり、研修会の企画・調整を行うとともに、地域における課題の共有を行った。会議では、浜松市内における神経難病療養者の現状や療養上の課題、支援者のニーズについてディスカッションを重ねた。また、「神経難病支援者の会」としての広報活動にも取り組み、チラシの配布やその内容の更新に関する検討も行った。

5. 考察および今後の課題

2024年度は、昨年度に引き続き、神経難病療養者に対する理解と支援の向上を目的とした研修会および事例検討会を実施し、全体として高い参加満足度が得られた。とくに今年度は新たな取り組みとして、高校生を対象とした研修会を開催したことにより、より若い世代への啓発という視点からも大きな意義を持つ活動となった。

高校生は、事前に神経難病療養者とのオンライン交流を経験していたこともあり、ICT機器や透明文字盤に対する関心が高く、体験にも積極的に参加する様子が見られた。これは、従来の医療系大学生や専門職とは異なる新たな層へのアプローチとして、今後の展開に広がりを持たせる成果といえる。若年層から神経難病に対する理解を深めていくことは、地域全体の支援体制の基盤づくりにおいても非常に重要であり、教育的意義も大きい。また、大学生にとっても、他大学の学生や専門職との交流は良い刺激となり、将来の進路を考えるうえでの貴重な学びの機会となっていた。体験を通して「支援の難しさ」や「自身の限界」を実感することで、今後の学習意欲や課題意識の醸成にもつながっていた。

該当欄の□を■にし、必要事項を記入してください

倫理審査	<input type="checkbox"/> 承認番号() <input checked="" type="checkbox"/> 該当しない	
利益相反	<input checked="" type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり()	
発表状況	種別	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表 <input type="checkbox"/> 紀要 <input type="checkbox"/> その他()
	年月日	年 月 日 (<input type="checkbox"/> 確定 <input type="checkbox"/> 予定)

表2. 事例検討会 参加者(1回目)

職種	人数(n=10)
看護師	5
理学療法士	3
介護福祉士	1
保健師	1
ケアマネジャー	1

表3. 事例検討会 参加者(2回目)

職種	人数(n=12)
看護師	9
理学療法士	2
介護福祉士	1

【2024年度地域連携事業費報告書】

さらに、課題整理ツールを用いた事例検討会もオンラインで継続実施され、在宅支援に関わる多職種への参加が得られた。日々の業務に追われる支援者にとって、移動の負担なく参加できる形式は継続の可能性を高める要素であり、今後もオンライン形式と対面形式を適宜使い分けながら、柔軟な開催方法を検討する必要がある。

研修や検討会の準備・実施に加え、専門職による定例会議も定着しつつあり、地域におけるネットワーク形成と情報共有の場として機能している。一方で、実際にICT機器を体験する機会は、会場やスタッフ、機器数の制限から、参加者数に限りがある点は引き続きの課題である。特に、体験を通して学びを深めることができるこの形式の研修は、オンラインでは再現が難しく、今後は小規模分散型での開催や、各校・各施設での出張型研修なども検討していく必要がある。また、参加者からは「機器の種類や使い方についてより詳しい説明がほしい」「支援機器の地域での普及状況を知りたい」といった具体的な要望も寄せられており、今後のプログラム設計に活かしていくことが求められる。

以上より、2024年度も事業目標は概ね達成されたといえるが、より多様な参加者に対応したプログラムの充実、支援機器の最新情報提供、そして地域との連携強化を図りながら、今後も神経難病療養者の在宅生活を支える体制づくりに貢献していきたい。

該当欄の□を■にし、必要事項を記入してください

倫理審査	<input type="checkbox"/> 承認番号 () <input checked="" type="checkbox"/> 該当しない	
利益相反	<input checked="" type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり ()	
発表状況	種別	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表 <input type="checkbox"/> 紀要 <input type="checkbox"/> その他 ()
	年月日	年 月 日 (<input type="checkbox"/> 確定 <input type="checkbox"/> 予定)